



活動報告書

2025-2026

ザンビアから ゴミ山をなくす



～ゴミ分別から始まる環境教育～



1, ご挨拶

この度は、「ザンビアのカブロンガ・ボーイズ中学校にゴミ分別システムをつくるプロジェクト」へ温かいご支援をいただき、誠にありがとうございました。

皆さまからお預かりしたご支援のおかげで、ザンビア・ルサカ市にあるカブロンガ・ボーイズ校において、ゴミ分別ステーションの建設やゴミ箱の設置、環境教育の準備など、数多くの取り組みを進めることができました。

プロジェクトを開始した当初、現地には分別を行うための設備がなく、学校内には長年放置されたゴミ山も存在していました。

しかし、現地の先生方や生徒たち、ルサカ・ローターアクトクラブの仲間たち、そして日本から応援してくださる皆さまの力が集まったことで、一つひとつ課題を乗り越えながら前へ進むことができました。

今回の活動を通じて改めて感じたのは、「設備をつくること」以上に、「人を育てること」の大切さです。

分別ステーションやゴミ箱はあくまでスタート地点です。

これから生徒たちが環境について学び、自ら考え、行動し、その取り組みが学校全体へ、そして地域へと広がっていくことを私たちは願っています。

本報告書では、皆さまからいただいたご支援がどのように活用され、現地でどのような変化が生まれているのかをご報告いたします。

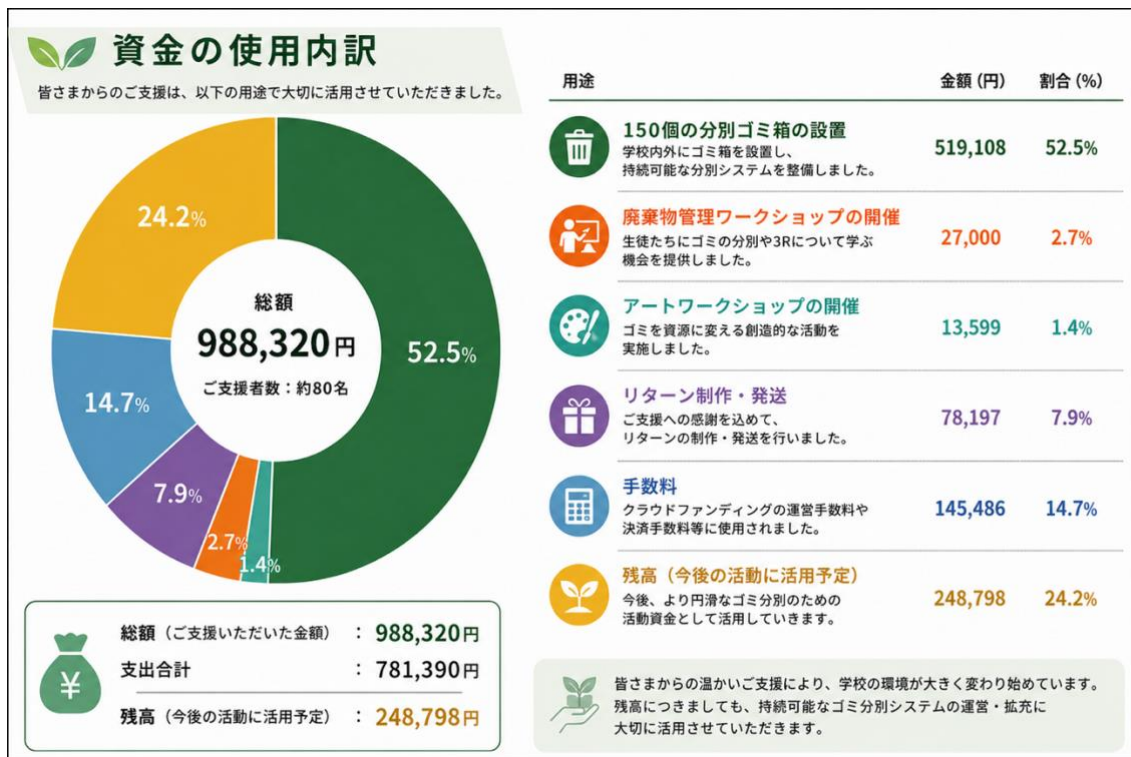
まだ道半ばではありますが、確実に前進している現地の様子を感じていただけましたら幸いです。

改めまして、本プロジェクトを支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

今後とも温かく見守っていただけますと幸いです。

Japan O.K. ローターアクトEクラブ一同

2, 皆さまからのご支援



3, 活動内容

3-① 分別ステーション建設プロジェクトの始動

本プロジェクトは、ザンビア・ルサカ市にあるカブロンガ・ボーイズ中学校において、感染症の温床となっているゴミ山をなくすことを目的としてスタートしました。そのために、学校内に持続可能なゴミ分別システムを構築し、分別した資源ゴミを売却して得られる収益を、老朽化した学校施設の修繕に充てる循環型の仕組みづくりを目指しています。

きっかけは、2025年8月頃にルサカ・ローターアクトクラブのブリジー会長が同校の副校長先生と出会ったことでした。その後、私たちも現地プロジェクトへ参加し、ザンビア在住の国際奉仕委員長・谷野理星が2025年10月に初めて学校を訪問し、当プロジェクトの統括となりました。

しかし、そこにあったのは機能していない分別ステーションと、散らかるゴミでした。



雨季が本格化する前に分別場を完成させるため、現地ローターアクトクラブと学校は協力して資金を集めました。2025年11月には土台工事を実施しました

が、その後は資金不足により工事が中断しました。屋根や窓、仕上げ工事が残り、完成目前で工事を止めざるを得ない状況となりました。

そのような状況の中、「ようやく着手できた分別ステーションを、雨季の本格化前に完成させ、ゴミの放置による感染症などの衛生問題が深刻化する前に利用を開始したい。」という現地の強い思いを受け、私たちは募金活動を開始しました。

その結果、多くの皆さまからご支援をいただき、2026年1月、ついに分別ステーションが完成しました。生徒たちが安全にゴミを分別できる環境が整ったことは、学校にとって大きな一歩となりました。

ルサカ・ローターアクトクラブの資金調達により途中まで建設した分別ステー



ション（左）と、当クラブの資金調達により完成した分別ステーション（右）

3-② ゴミ山撤去と分別システムの整備

分別ステーションが完成しても、すぐに利用できる状況ではありませんでした。分別ステーションの前には、長年放置されていた大きなゴミ山が残されていたためです。過去に設置されていた簡易分別ステーションが雨で流され、その後行き場を失ったゴミが積み重なり、危険な状態となっていました。

副校長先生は回収業者と何度も交渉を重ねました。しかし、雨季には大型トラックがぬかるみに埋まり、作業は思うように進みませんでした。それでも約2か月半をかけて、ゴミの大部分を撤去することができました。その結果、生徒たちが安全に分別場へアクセスできる環境が整いました。

当初は、240Lの大型ローラー付きゴミ箱で校内を統一する計画でした。ところが、現地調査を進める中で二つの課題が明らかになりました。

一つは、教室内に分別用ゴミ箱がなければ、生徒は一度すべてのゴミをまとめて捨て、その後大型ゴミ箱で分別し直す必要があり、実用的ではないこと。

もう一つは、大型ゴミ箱を屋外に設置すると盗難の危険性が高いことでした。

そこで計画を見直しました。クラウドファンディングでは、学校内を三つの設置場所に分け、それぞれの用途に応じて合計150個のゴミ箱を導入しました。

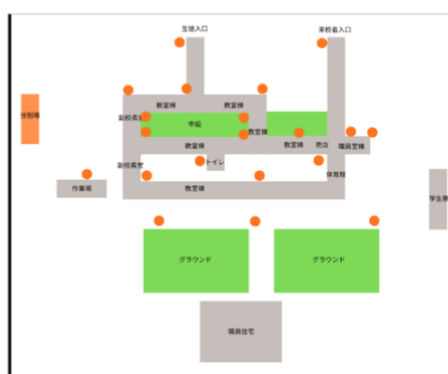


以上の三層構造の分別システムへ変更し、学校の実情に合った持続可能な仕組みづくりを進めています。また、全てのゴミ箱に当クラブのメンバー（五日市千蒼子：熊本在住）がデザインした分別のイラストを貼り付けました。さらに、当クラブとパートナーシップを結んだルサカ・ローターアクトクラブと当クラブのローターアクトのロゴを併せて表示し、共同プロジェクトであることが分かるデザインにいたしました。

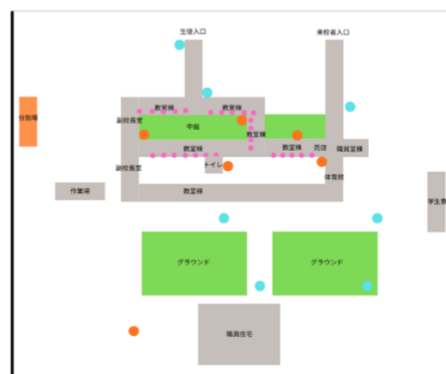


- ローラー付き(校舎内)
- 鉄網(敷地内)
- バケツ(教室内)

Before



After



③-3 ゴミ箱の引渡しと環境教育のスタート

2026年5月21日、ルサカ・ローターアクトクラブのブリジー会長をはじめとする理事メンバーとともに、学校へのゴミ箱引渡し式を実施しました。

式では、生徒たちへ

「なぜ日本のようにゴミを分別しないのだと思いますか？」
という問いを投げかけました。

すると、

「ポイ捨てすることが当たり前だから」
「その方が楽だから」
「大人が捨てているのを見て育ったから」

など、生徒たちから率直な意見が次々と出されました。

また、

「『プラスチック』とは何を指すか」

「現在の分別カテゴリーに不足しているものは何か」

など、生徒自身が主体となって活発な議論を行いました。



現地ロータリークラブから学校へのゴミ箱引き渡し（左）と、代表生徒とプラスチックの分別方法を確認（右）

当クラブメンバーでザンビア在住のりせは、各クラス代表 66 名に対し、環境委員としての役割を伝えました。

- ゴミ箱を適切に管理すること
- クラスメイトへ正しい分別方法とその大切さを伝えること

が環境委員としての大切な役割だと伝えました。

生徒たちは真剣な表情で耳を傾け、学校をより良くしたいという思いが伝わってきました。

また校長先生からは、

「これまでも多くの団体が支援を約束してくれたが、実現しなかったことも多かった。しかし今回、本当に分別ステーションが完成し、ゴミ箱まで届いたことで、このプロジェクトは本気なのだと感じた。」
という言葉을いただき、私たちにとっても非常に意義深い一日となりました。



副校長による代表生徒へのメッセージ（左）、現地ロータリークラブの会長、副校長、現地ロータリークラブの次期会長、校長、現地ロータリークラブのメンバー2名（右）

③-4 廃棄物管理ワークショップ

ゴミ箱の寄贈に合わせて、各クラスから選出された66名の代表生徒を対象に、LISWMC（ルサカ統合廃棄物管理会社）という市のゴミ収集管理などを担う半政府による廃棄物管理ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、ゴミの分別や処理の流れ、3Rの考え方、環境・社会・経済への影響、SDGsとの関わりなど、持続可能な廃棄物管理の基礎について学びました。

講義では、生徒たちからも積極的に質問が寄せられました。

「年上の方がポイ捨てしていたらどうやって失礼なく注意できますか。」

「正しくゴミ処理をすると違法回収業者が仕事を失ってしまわないですか。」

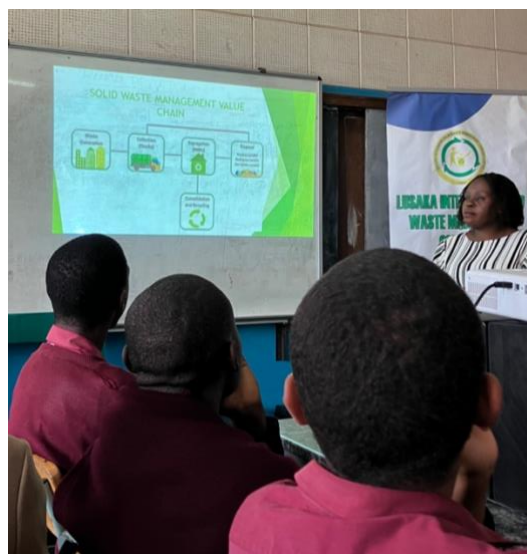
「ゴミ回収が来ない地域ではどうすればいいですか。」

など、自分たちの生活と結び付けた率直な意見が数多く出されました。

特に印象的だったのは、生徒たちがゴミ問題をただの環境問題として捉えていなかったことです。

低所得地域で暮らす生徒が多く、貧困や雇用、地域社会の課題についても話し合いました。

環境問題を解決するためには、一人ひとりの意識だけでなく、**社会の仕組みや地域の実情を理解することも大切である**ことを、生徒たちとともに考え、学びを深める素晴らしい機会となりました。



廃棄物管理ワークショップを受講する生徒の様子（左）、ワークショップの様子（右）

③-5「ゴミ」を「資源」に変えるアートワークショップ

廃棄物管理ワークショップで学んだ内容を実践につなげるため、6月11日に、生徒たちを対象としたアートワークショップを開催しました。

テーマは、「**ゴミを資源に変える**」。

身近にあるペットボトルやお菓子の袋、ティーバッグ、鉛筆の削りかすなどの廃材を使い、一人ひとりが自由な発想で作品制作に取り組みました。

制作前には、まずゴミを観察し、

「透明」「硬い」「柔らかい」「切れる」「破れる」

など、素材の特徴をみんなで話し合いました。

最初は戸惑う様子も見られました。しかし、制作を進めるうちに少しずつアイデアを形にしていきました。

- ・お菓子の袋を生き物に見立てた作品
- ・ゴミ袋を海に見立てた作品
- ・鉛筆の削りかすで屋根を表現した作品
- ・ティーバッグの中身を土に見立てた作品

など、多様な発想が数多く生まれました。



完成した作品には、

「きれいな地域と汚れた地域の違い」、「環境汚染によって苦しむ魚たち」など、環境へのメッセージを込めたものも多く見られ、生徒一人ひとりが自分の思いを表現していました。



また、ワークショップを実施すると告知してから約1週間の間に、誰から頼まれたわけでもなく、自宅で自主的に作品を制作して持参してくれた生徒が3名

いました。「ゴミ」を題材に、自ら考え、表現しようとする姿勢は、この活動が生徒たちの心に届いていることを実感させてくれる出来事でした。

今回のワークショップを通して、ゴミは単なる「捨てるもの」ではなく、新しい価値や表現を生み出す「資源」でもあることを、生徒たちとともに体験することができました。

③-6 日本での活動報告・交流

当クラブメンバーでザンビア在住の谷野理星は、日本への一時帰国中、当クラブの国内第一拠点地である大分県別府市で開催された定例イベント「インターナショナルナイト」において、ザンビアと本プロジェクトについて紹介しました。

前半では、ザンビアの歴史や文化、社会課題について、自身の現地での生活や経験を交えながら紹介しました。後半では、本プロジェクトの概要に加え、現地で活動する中で感じたことや、文字や映像だけでは伝えきれないエピソード、今後の展望について報告しました。

また、アートワークショップで生徒たちが制作した作品を展示・紹介し、それぞれの作品に込められた思いや制作の背景について参加者と意見交換を行いました。参加者からは多くの質問が寄せられ、日本にしながらザンビアの現状や本プロジェクトへの理解を深める機会となりました。

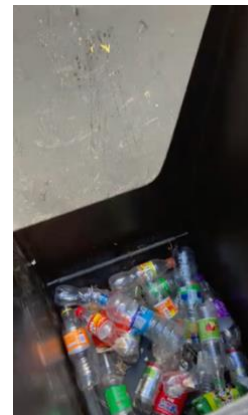


4、活動の成果（現時点）

ゴミ箱の設置からまだ日が浅く、今後も継続的なモニタリングが必要ではありますが、現時点でも学校内や生徒たちに変化が見られ始めています。

4-① ゴミ分別の定着

ゴミの分別状況を調査したところ、240L のローラー付きゴミ箱 30 台では、1 日当たり約 720L（容量の約 10%）の利用が確認されました。また、屋外設置の 200L ゴミ箱 21 台では、約 210L（容量の約 5%）が利用されていました。これらを合わせると、毎日約 930L のゴミが分別されていると推計されます。これは、ルサカで一人当たりが排出するゴミ全体の約 70%が分別されていると推測され、分別システムが着実に学校へ浸透し始めていることがうかがえます。（本プロジェクトで導入したペットボトルのゴミ箱の中：右）



4-② リサイクルによる収益の創出

回収した資源ゴミはこれまで3ヶ月で2回リサイクル業者へ引き渡しを行い、約1万円の収入を得ることができました。このペースを維持できれば、約1年で学校の破損した窓ガラスの一部修繕に必要な資金を確保できる見込みです。ゴミを「捨てるもの」ではなく「資源」として活用し、その収益を学校へ還元する循環型の仕組みが少しずつ機能し始めています。（ゴミ分別ステーションに集まったペットボトルをリサイクル会社が計測している様子：右）



4-③ 環境意識の変化

環境委員 66 名のうち 8 名を対象に実施したアンケートでは、「周りでゴミをゴミ箱に入れる人が増えた」「家でもゴミの管理方法を変えた」といった回答が寄せられました。学校での学びが家庭にも波及し、生徒自身の環境意識や行動に変化が生まれていることがうかがえます。

4-④ 主体性の向上

生徒たちからは、「この活動を自分の地域でもやってみたい」「ゴミ管理のアプリを作りたい」といった声も聞かれました。環境問題を自分自身の課題として捉え、地域へ活動を広げようとする姿勢や、新たなアイデアを生み出そうとする主体性が育まれ始めています。（使用済みの段ボールで持ち運びゴミ箱を作成した生徒：右）



5. おわりに

今回の活動を通じて、私たちは設備を整えるだけでなく、生徒たちの意識や行動の変化という大きな成果を見ることができました。衛生管理委員会委員長を務める一人の生徒であるギフト君は、ワークショップの準備や片付けを率先して手伝い、「学校だけでなく地域でもこの活動を広げたい」と話してくれました。このような生徒主体の姿勢が育ち始めていることは、本プロジェクトの大きな成果の一つです。

今後は、分別・リサイクル・学校修繕の循環を定着させます。さらに、生徒主体の啓発活動やコンポスト、バイオガスの導入にも取り組む予定です。将来的には、他校への展開や政策提言へと発展させ、学校から地域、そしてザンビア全体へ持続可能な廃棄物管理の輪を広げていきます。



衛生管理委員会委員長を務める一人の生徒であるギフト君（左）と寄付者の一部を記載したプレート（右）

改めまして、本プロジェクトをご支援くださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

Japan O.K. ローターアクトEクラブ一同